

レポート書式の例

レポート書式には、注のつけ方によって大きく2種類の書式があります。大まかにいえば、①補足説明と文献情報とともに「注」として扱う方法と、②これらを別々に扱う方法です。以下にそれぞれの例を、例①、例②として紹介します。

レポート書式の例① ▶▶ 補足説明と文献情報とともに「注」として扱う方法

はじめに、提出日、科目、開講曜日・時間、レポートのテーマ、自分の学部(学科)・学年・クラス・学生証番号・氏名を必ず書くこと。1枚目は表紙にして、そこに記載するよう指示する教員もいます。

単行本から引用・参照した場合は、編著者名、発行年(月)、書名、出版社名、引用・参照ページを記します。

字数指定がある場合、総字数を書きおきましょう。

提出日：2017年7月10日

2017年度春学期科目「言語学概説Ⅰ」（月曜・1限）レポート
インターネット上の書き言葉
××学部△学科 1年1組 17x0123 法政太郎

インターネット上には、無数の言葉がまさに蜘蛛の巣のように張り巡らされている⁽¹⁾。グローバルなコミュニケーション空間では、英語(米語)が「公用語」となっているように見えるが、以下のような指摘もある。

一方、インターネットの世界的普及は、必ずしも文化の画一化やアメリカ化の促進だけを意味するものではないという見方もある。反対に少数民族の文化やマイノリティ集団に対し、それぞれの自己表現の機会を提供するものであるとするのである。⁽²⁾

また、「ブログ検索サービスを提供する米テクノラティが4月5日に発表した調査結果によると、2006年第4四半期は投稿数で日本語ブログが世界最多だった。⁽³⁾」という記事もあり、実態としては、母国語によるインターネット利用が中心で、いわば言語別のコミュニティが形作られているのではないかと考えられる。

さて、インターネットでは音声も動画も配信できるが、現在のところ、文字による情報発信やコミュニケーションが基本であるといよいだろう。しかし、そこでは単純に「書き言葉」とはいえない多種多様な言葉遣い、一般的な書き言葉というよりも話し言葉に近い、独特な「書き言葉」が使われる傾向がある。たとえば、田中⁽⁴⁾によれば…

- 1 -

例①の書式では、このように注番号をつけて、その箇所に関する補足説明や引用・参照した出典を、各ページ下(脚注)またはレポートの最後に(後注)まとめて記します。ワープロソフトには脚注機能がありますので活用しましょう。

雑誌論文を引用・参照した場合は、著者名、発行年(月)、論文名、雑誌名(発行所名)、巻号、引用・参照ページを記します。

はできないだろう。そして研究方法の上でも、WWWのコーパス化以下に、インターネットは言語研究に新たな世界を切り拓く可能性を秘めていると考えられる。

注
(1) インターネット上のウェブシステムを指す「World Wide Web (WWW)」という語に使われ、その略称である「Web (ウェブ)」という言葉は、もともと「蜘蛛の巣」を意味していたが、ハイパーリンクによって、ページやファイルのつながる様子が蜘蛛の巣のようであるため、インターネット用語としても用いられるようになった。

(2) 上村圭介・原田泉・土屋大洋(2005)『インターネットにおける言語と文化受容』、NTT出版、p. 3.

(3) 武部健一(2007)「記事のつゆやきー英語を超えた日本語ブログの投稿数、その理由は?」、『ipro (自経研研報)』、<http://ipro.nikkeiipc.jp/article/COLUMN/20070411/268068/>、2014年1月17日取得、第一段落。

(4) 田中久美子(2008)「ケータイ小説の表現は新しいゆ」、『国文学：解釈と教材の研究』53(5)、pp. 38-45.

(5) Biber, D. et al. (1998) *Corpus Linguistics : Investigating Language Structure and Use*, Cambridge University Press, pp. 154-155.

(6) 荻野綱明(2008)「WWWをコーパスとして利用する研究一文系と理系の観点からー」『日本語学』27(2)、pp. 4-9.

(総字数 2015字)

洋書の場合、書名は斜体(イタリック)で書きます。

■で示す内容は、両書式に共通する注意事項、■で示す内容は、各書式に特有の注意事項です。なお、これらはあくまで一例であり、学問分野ごとに書式が異なります。レポートごとに所定の書式がある場合は、それにしががいきましょう。

レポート書式の例② ▶▶ 「注」は補足説明のみとし、文献情報は別に扱う方法

例②の書式では、注番号をつけるのは補足説明のみとし、引用・参照した文献は、本文中の適切な箇所にカッコ書き等で明記します。

2文以上の長い引用は、上下を1行ずつ空け、左から2字下げで記します。

「注」は補足説明のみとし、別に「引用文献」や「参考文献」の項目を立て、そこに典拠をまとめます。文献は、著者の姓のアルファベット順にリストアップします。この例では、Biber, Kamimura, Ogino, …の順となります。

振出日：2017年7月10日

2017年度春学期科目「言語学概説1」（月曜・1限）レポート

インターネット上の書き言葉

××学部△学科 1年1組 17x0123 法政太郎

インターネット上には、無数の言葉がまさに蜘蛛の巣のように張り巡らされている^①。グローバルなコミュニケーション空間では、英語(米語)が「公用語」となっているように見えるが、以下のような指摘もある。

一方、インターネットの世界的普及は、必ずしも文化の画一化やアメリカ化の促進だけを意味するものではないという見方もある。反対に少数民族の文化やマイノリティ集団に対し、それぞれの自己表現の機会を提供するものであるとするのである。(上村ほか2005:3)

また、「ブログ検索サービスを提供する米テクノラティが4月5日に発表した調査結果によると、2006年第4四半期は投稿数で日本語ブログが世界最多だった」(武部2007:第1段落)という記事もあり、実態としては、母国語によるインターネット利用が中心で、いわば言語別のコミュニティが形作られているのではないかと考えられる。

さて、インターネットでは音声も動画も配信できるが、現在のところ、文字による情報発信やコミュニケーションが基本であるといつてよいだろう。しかし、そこでは単純に「書き言葉」とはいえない多種多様な言葉遣い、一般的な書き言葉というよりも話し言葉に近い、独特な「書き言葉」が使われる傾向がある。たとえば、田中久美子(2008)によれば、…

- 1 -

引用部分の後は、典拠を(著者名 出版年: ページ)と明記します。

短い引用は、カギカッコでどこからどこまで引用であるかを明確に示します。

直接の引用ではなく、文献の内容を自分の言葉でまとめなおした場合は、このように当該部分の典拠を明記します。文献内容に言及した後、以下のように典拠を明記する方法もあります。

田中久美子によれば、…である(田中2008)。

はできないだろう。そして研究方法の上でも、WWWのコーパス化以下に、インターネットは言語研究に新たな世界を切り拓く可能性を秘めていると考えられる。

注
(1) インターネット上のウェブシステムを指す「World Wide Web (WWW)」という語に替わり、その略称でもある「Web (ウェブ)」という言葉は、もともと「蜘蛛の巣」を意味していたが、ハイパーリンクによって、ページやファイルのつながる様子が蜘蛛の巣のようであるため、インターネット用語としても用いられるようになった。

参考文献
Biber, Douglas, Susan Conrad, Randi Reppen, 1998, *Corpus Linguistics : Investigating Language Structure and Use*, Cambridge : Cambridge University Press.
上村圭介・原田泉・土屋大洋, 2005, 「インターネットにおける言語と文化受容」NTT出版。
荻野剛明, 2008, 「WWWをコーパスとして利用する研究一文系と理系の観点から」『日本語学』27 (2) : 24-9。
武部健一, 2007, 「記者のつづき ―英語を超えた日本語ブログの投稿数、その理由は?」『JPro(自経PPE)』(2014年1月17日取得, <http://ipro.nikkei.co.jp/article/COLUMN/20070411/2680668/>)。
田中久美子, (2008), 「ケータイ小説の表現は貧しいか」『國文学: 解釈と教材の研究』53 (5) : pp. 38-45。

サイト上に掲載された情報を引用・参照した場合は、著者名、最終更新年、ページタイトル、サイト名、取得(アクセス)した日付、URLを記します。

(総字数 2015字)

- 3 -